

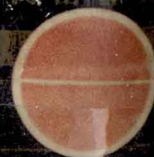
復活
イワン・イリイチの死

46

世界文学全集

46

新潮社



世界文学全集

トルストイ
復活
イワン・イリイチの死

中村白葉訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第46巻

トルストイ 復活 イワン・イリイチの死

昭和44年9月20日初版印刷

昭和44年9月30日初版発行

訳者 中村白葉

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定価 750 円

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711(大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

トルストイ

復 活		3
付 録		331
各章の内容		333
イワン・イリイチの死		337
年 表		378
解 説		387

巻頭口絵 トルストイ肖像

M. V. ネステロフ筆 (1907年)

本文カラーさし絵

L. O. パステルナーク

装 幀 亀倉雄策

復 活

中村白葉 訳

マタイ伝第十八章第二十一節。その時ペテロ彼に來りて曰いけるは、主よ！幾次までわが兄弟のわれに罪を赦すべきか？ 七次までか？ 第二十二節。イエス彼に曰いけるは、なんじに七次とは言わじ七次を七十倍せよ。

マタイ伝第七章第三節。なんじ兄弟の目にある物屑を見ておのが目にある梁木を感ぜざるは何ぞや。

ヨハネ伝第八章第七節。なんじのうち罪なき者まず彼女に石を投げよ。

ルカ伝第六章第四十節。弟子はその師に踰らず、されど力めてやまざれば皆その師のごとくなるべし。

主要人物

ニエフリユードフ（ドミートリイ・イワーノヴィッチ） 愛称ミーチャ、公爵、本編の主人公。

カチューシャ（エカテリーナ・ミハイロワ・マースロワ） 妓楼では、リュボーフィ、リュバーシャ、リュープカ、また書中、ときとしてカテリーナ、カーチャとも呼ばれる。本編の女主人公。ニエフリユードフに処女を奪われた倫落の女。

マリーヤ・イワーノヴナ ニエフリユードフの叔母で女地主。

ソフィヤ・イワーノヴナ その妹、姉とともに暮している。

ミッシイ（マリーヤ・コルチャギナ） 公爵令嬢、ニエフリユードフと結婚するものとも思い、自分も思っていた。

ソフィヤ・ワシーリエブナ その母、コルチャギン公爵夫人。

アグラフェーナ・ペトロヴナ ニエフリユードフ家の家政婦。

マリーヤ・ワシーリエブナ 貴族長夫人。

ファナリーン（アナトリー・ペトロヴィッチ） 弁護士。

フェドーシヤ（ピリユーコワ） カチューシャともっとも親しい女囚。若く美しい百姓の妻。

コラブリョーワ カチューシャと同房の女囚、囚徒頭の老婆。

メニショーフ むすこのメニショーフとともに無実の罪で投獄されている老婆。

ボゴドゥホーフスカヤ（ヴェーラ・エフレモヴナ） またはヴェーロチカという。女流革命家、国事犯の女囚。

シュストーワ（リディア） 不当に検挙されて、ペトロバウロフスク要

塞に長く幽閉されている、気の毒な娘。

マリーヤ・バウロヴナ またはマリーシャ。国事犯の女囚。自己犠牲に徹した美しい処女。カチューシャに感化を与える。

マースレンコフ（ミハイル・イワーノヴィッチ） またはマリーシャ、ニエフリユードフの旧友、モスクワの副知事。

チャールスカヤ伯爵夫人（エカテリーナ・イワーノヴナ） 前國務大臣チャールスキイ伯爵の妻。ニエフリユードフの母方の伯母にあたり、ペテルブルグの名流夫人。

マリエット（チュエルヴィヤンスカヤ） ペテルブルグの大官の妻。伯爵夫人の親友。

ナターリヤ・イワーノヴナ（ラゴージンスカヤ） ナターシャともいう。ニエフリユードフの姉。

イグナーチイ・ニキーフォロヴィッチ（ラゴージンスキイ） 姉の夫、裁判官。

男爵ウオロビョフ 請願委員長。

ウオーリフ（ウラジミール・ワシーリエヴィッチ） 元老院議員。

ニキーチン 元老院議長。

セレーニン 検事次長。ニエフリユードフの旧友。

トポローフ 神聖事務省長官。

シモンソン（ウラジミール・イワーノヴィッチ） 国事犯徒刑囚、のちにカチューシャと結婚する。

クルイリツォーフ 国事犯徒刑囚、流刑の途中、肺病のため死ぬ。

ノヴォドゥウオーロフ 同じく国事犯、野心的な革命家。

たこうした神の世界の美——平和と、一致と、愛にみちびく美でもなくて、彼らが互いに他を支配し合うために自分勝手に考えだした事柄なのであった。

こうして、県監獄の事務室においても、神聖で貴重なものとされていたのは、いっさいの動物や人間に春の感動と喜びが与えられているということではなくて、その前日、当四月二十八日午前九時、目下予審中の三囚人——二人の女囚と一人の男囚を、地方裁判所へ出頭せしむべしという、印章・頭書^{しやうしよ}つきの通告書が受け取られてあったことであつた。なかでも女囚の一人は、主犯者として、ひとりべつに護送しなければならなかつた。そこで、この命令にもとづいて、四月二十八日には、朝の八時に、うす暗いいやな臭いのする女囚監の廊下へ、看守長がはいって来た。それにつづいて、やつれた顔に白髪の縮れ髪、金モールの袖飾りのついたジャケツに、青いヘリのついた帯をしめた一人の女がはいって来た。これは女看守であつた。

「マースロワのお呼びだしですか？」廊下のほうへ向かつてあいていた監房のドアの一つへ、当直の看守長といっしょに近づきながら、彼女はこうたずねた。

看守長は、鉄の音をがちやがちやさせながら錠はずし、監房のドアをあけると、その中からは廊下よりもいっそうひどい悪臭がむつときたので、いきなりこう叫んだ——

「マースロワ、出廷！」そしてすぐまたドアをしめて、相手の出てくるのを待ちはじめた。

いかに監獄でも、戸外には、風が市中へはこんでくる、新鮮な、いきいきした野の空気があつた。しかし、廊下には、排泄物^{はいせつぶつ}、コルタや、腐敗物などの悪臭にひたされた、重苦しい、チフス的な空気があつて、それが、新しくはいってくる者をだれでもすぐ、悲しいようなめいいた気分にしてしまう。わるい空気にはなれっこになつていいたにもかかわらず、この気分を、いま、外からはいつてきた女看守も、わが身にはっきりと体験した。廊下へはいると同時に、彼女は急に疲労

何十万という人間が一つの小さな場所へ集まり、そこで互いにせり合つて、その土地をみにくくしようとする骨を折つたところで、またその地面に何もはやさないようにとどんなに石を敷きつめたところで、またまた萌え出てくる草を一本残らずたんねんに取りつくしたところで、また石炭や石油でどんなにいふしたところで、またどんなに木を刈りこんだり、鳥や獣を追つぱらつたりしたところで、——春はやつぱり春であつた、都会の中にあつてさえも。太陽が暖めると、草はよみがえつて、根こぎにされなかつたところならどこでも、並木街の芝生の上ばかりでなく、しき石のあいだからさえ萌えだして、いたるところ青い色を見せてくるし、白樺や、白楊や、みぎくらなども、ねばりのある香りのかい若葉を開き、菩提樹^{ぼだいじゆ}ははぜた新芽をふくらましてくるし、鴉や、雀や、鳩なども、春の喜びにみちて、はやくも巢の支度をはじめ、日あたりのいい壁には、蠅がぶんぶんうなつていた。こうして、植物も鳥類も、昆虫も子供も、みな嚙々として楽しんでゐた。が、人々は——一人前のおとなだけは——自分で自分をだまして苦しみめたり、互いにだまし合つたり苦しめ合つたりすることをやめなかつた。いったい人間の考えでは、神聖で貴重なものは、こうした春の朝でもなければ、またあらゆる生物の幸福のために与えられ

を感じて、眠気を催してきたのだった。

監房の中ではあわただしげな音が聞こえていた——女たちの声やだしの足音が。

「おい、どうしたんだ、早くしないか、マースロワ！」と看守長は、監房のドアの中へ叫んだ。

二分ばかりして、元氣な足どりでドアの中から出てくると、すばやくくると身をかえして看守長のそばに立ったのは、背のあまり高くない、もりあがったような胸をした、白いジャケツと白いスカートの上に、灰色のガウンをはおった若い女であった。女は、足には布の長くつ下をはき、その上に半屋靴をつけ、頭には白い三角ずきをまきつけて、その下からことさらに、黒い縮れ髪の小さい輪をのぞかせていた。彼女の顔は、長いあいだ幽閉されていた者によくある一種特別の白さを持っており、その白さが、穴倉の中のじゃがいもの芽を思いださせた。小さいまゐるい感じの手も、ガウンの大きなえりの下からのぞいている肉づきのいい白い首も、同じような感じだった。その顔、とくにつやのない青白さの中で目についたのは、片方だけすこし斜視の、まっくらな、よく光る、いくらかはれぼったくはあるが、いかにもしめようとしたときに、そこから、何もかぶらない白髪頭の老婆の、青白い、きびしそうな、しわだらけの顔がつきだされた。老婆は、なにやらマースロワに話しかけた。が、看守長がその頭へドアを押しつけたので、頭は消えた。監房の中では、女の声が笑いだした。マースロワもにっこりして、ドアについている小さな格子窓をふりかえった。老婆は、内側から小窓にびったりとはりついて、しゃがれ声でこう言った——

「どんなことがあっても、けっしてよけいなこと言うでねえだよ、ひ

とつことだけ言いはあるだよ、いいかね」

「そうね、ひとつことだけ言ってるや、いまよりわるくなることはないわ」と、頭を振ってマースロワは言った。

「ひとつにきまつたら、ふたつあつてたまるか」と、自分のしやれにも役人らしい自信を見せて、看守長は言った。「さあ、おれについてこい、進め！」

小窓に見えていた老婆の目が消えて、マースロワは廊下のまん中へ出ると、小さきみな早い足どりで看守長のあとから歩きだした。彼らは石の段をおり、女囚監以上にはいやな臭いのする、騒々しい男囚監のそばを、ドアというドアの通風口からのぞいている目に見送られながら通りすぎて、事務室へはいった、と、そこにはもう、銃を手にした二人の護送兵が立っていた。腰掛けていた一人の書記は、たばこくさい紙片を兵隊の一人に渡して、女囚のほうを指さして、言った——「さあ、受け取れ」——一人の兵隊——赤いあばたづらをしたニジニ・ノールゴロド生まれの百姓は、その紙片を外套の袖の折り返しにはさんで、女囚のほうを見てにやにやしながら、もう一人の、ほお骨の高いチュワツシュ人の同僚に、目くばせした。こうして兵たちは女囚をつれて階段をおり、表出口のほうへおもむいた。

表出口のドアはくぐりだけがあいたので、女囚をつれた二人の兵隊は、そのしきいをまたいで中庭へ出ると、構内をぬけ、街へ出て、舗道のまん中を歩きだした。

辻馬車屋や、小売商人や、料理女や、労働者や、官吏などが立ちどまって、好奇の目で女囚をながめるのだった。が、なかには頭を振って、『身もちがわるいとあなるんだ、おれたちのようにしてりゃいいんだが』こんなふうを考える者もあった。子供たちは、おびえたような顔をして、女どろぼうを見ていたが、その背後に二人の兵隊のいるのを見ると、女どろぼうも今ではもうなんにもできまいと思つて、やっと安心するのだった。また、市中へ炭を売りに来て、茶店でお茶を飲んでいた近在の百姓は、彼女のそばへ近づくと、十字を切り、彼

女に「カベイカ銅貨を恵んだ。女囚はまっ赤になって、頭をさげ、なにやら口の中でつぶやいた。

自分にむけられてゐる視線を感じると、彼女はそっと、頭を動かさないで、自分を見ている人たちのほうへ横目を使うのだった。が、彼女には自分にむけられるこうした注意が、うれしかったのである。それに、獄内から見てずっと清浄な春の空気も、同じく彼女の気持ちに浮きたたせたが、しばらく歩きななかつたうえに、ぶさいくな牢屋靴をはいた足で、まる石のしき石道を歩いて行くのは、苦痛だった。

で、彼女は足もとにばかり気をつけて、できるだけ軽く足を踏むようにと心がけた。粉屋のそばを通りかかると、その前を人なれた数羽の鳩が、よちよちしながら歩いていたので、女囚はあやうく、暗藍色した一羽を踏みつけるところだった。鳩は舞いあがると、翼の音をたて、羽風をあびせかけながら、女囚の耳もとをかすめ去った。彼女は思わずにつこりしたが、やがて自分の今の身の上を思いだし、ほんと深いため息をついた。

2

女囚マースロワの経歴は、ごく平凡なものであった。マースロワは、きまつた亭主のない屋敷女の娘で、その屋敷女は、二人姉妹の女地主の持ち村で家畜番をしていた母親といっしょに住んでいたのだった。きまつた亭主を持たぬこの女は、毎年のように子供を生み、そして、田舎でふつうにされるとおり、生まれた子に洗礼だけは受けさせたが、それからあと母親は、ほしくもないのに生まれてきた不要な子供、働くじゃまになる赤ん坊には、ろくろく乳をくれないので、子供はじき干ばしになってしまうのだった。

こうして五人の子供が死んだ。彼らはみな洗礼を受けたが、そのあと乳がもらえないために死んでしまったのであった。六人目の子は、旅かせぎのジブシーが相手でできた女の子で、これも同じ運命におわ

るはずだったのだが、たまたま、二人の老嬢の一人が、牛くさいクリームクリームの件で家畜番をとがめようとして、家畜小屋へやって来た。家畜小屋には一人の産婦が、きれいな、じょうぶな赤子を抱いて寝ていた。老嬢はクリームクリームの件と、産婦を家畜小屋へ入れたことにたいして小言を言い、そのまま出て行こうとしたとたん、ふと赤ん坊の顔を見ると、それが急にかわいそうになってきて、進んで名づけ親になってやろうと言いだした。そして女の子を洗礼してやってから、自分の名づけ子をふびんがり、母親に金を恵んだり牛乳を与えたりしたので、女の子はやっと命拾いをした。そこで、二人の老嬢たちは、彼女をスバションナヤ（救われ）と呼んだ。

赤ん坊が三つの時に、母親は病みついて死んでしまった。祖母の家畜番が孫娘をもてあましたので、老嬢たちはその子を手もとへ引き取った。黒い目をした女の子は、やがて、なみはずれて元気な、かわいらしい少女になった。で、老嬢たちはたいへんその子に慰められるようになった。

老嬢は二人で——妹のほうは氣だても優しく、名をソフィヤ・イワーノヴナと呼ばれて、女の子の洗礼をしたのもこのひとだったが、姉のほうはすこし気性がきびしく、名をマリーヤ・イワーノヴナといった。ソフィヤ・イワーノヴナは、この子にきれいな着物を着せたり、読み書きを教えたりして、ゆくゆくは養い子にしようと思っていた。が、マリーヤ・イワーノヴナのほうは、つねづね、この子を働き手にして、いい小間使にしなければならぬと言っていたくらいなので、なかなかやかましく、きげんのわるい時には罰を加えたり、ときにはうち打うちうち擲うちうちさえすることがあった。こうした二様の感化のあいだに生いたつたので、大きくなった時には、この娘は、半ば小間使半ばお嬢さまふうのものにできあがった。名を呼ばれるにも、どっちつかずの呼びかたをとって、——カーチカでもなければカーテンカでもなく、カチューシャと呼ばれていた。彼女は縫いものをしたり、部屋を片づけたら、白墨で聖像をみがいたり、コーピーをいって、ひいて、煎じ

てだしたり、ちょっとした洗濯^{せんたく}ものをしたり、ときには老嬢たちといっしょにすわって、本を読んで聞かせたりもするのだった。

彼女は、いくどとなく縁談をもちこまれたが、どこへもとつごうとはしなかった。自分のようなお屋敷ぐらしの楽しさに甘やかされた者には、ふつうに縁談をもちこんでくる労働ぐらしの人々とは、とてもいっしょに暮らしてゆけそうにないことを感じていたので。

こうして、彼女は十六までをすごしてきた。満十六歳になった時に、老嬢たちのところへ、その甥にあたる金持ちの公爵の大学生がやって来た。そしてカチューシャは、当の相手にはもちろん、自分自身にさえうちあける勇氣はなかったが、この男を恋してしまった。その後また二年たつて、この同じ甥なる人が、戦争に行くみちで叔母たちのもとへ立ち寄り、そこに四日間滞在したあげく、出発の前夜にカチューシャを誘惑し、いよいよ最後の日に彼女の手へ百ループリ紙幣を押しこんで、立ち去ってしまった。彼の出生五か月後に、彼女は自分が妊娠^{ていご}していることを確実に知った。

それからというもの、彼女には、すべてのことがいとわしくなり、ただもう、どうしたらやがてくる恥ずかしいことからのがれられるかと、そればかりを考えるようになった。しぜん彼女は、主人たちにかえるにも氣のりがせず、怠りがちになったばかりか、——どうしてそんなことになったのか自分にもわからなかったが、——とつぜん何か爆発でもしたようになってしまった。そしてあとになって自分でも後悔したが、主人たちに向かってひどい悪態をつき、暇をくれとまで言ってしまったのである。

主人たちもすぐ腹を立てて、彼女に暇をだした。この家を出ると、彼女は郡の警察分署長の家へ小間使に住みこんだが、そこにはやつと三か月きりいられなかった。というのは、その署長が、もう五十にもなる老人でありながら、まもなく彼女に言い寄りをはじめて、一度など、あまり猛烈な態度に出たので、彼女もつかうとなり、彼をばかだの老いばれだのと罵^{ののし}ったあげく、思いきり胸を突きとばして、こ

ろばしてしまったからである。そこで、彼女は乱暴だといふので、追いだされてしまった。ところが、もうお産も迫っていたので、ほかに口をさがすわけにもいかず、やむなく、村で酒を売っている、寡婦の産婆のもとへ身を寄せた。お産は軽かった。けれども、村の病婦のとりあげをした産婆が産褥熱^{さんじよく}をカチューシャにうつしたので、生まれた男の子は、育兒院へ送らなければならなかった。ところがその子は、つれて行った老婆の話によると、先方へつくとすぐ死んでしまったというこであった。

カチューシャが産婆の家へ身を寄せたとき、彼女には、全部で百二十七ループリの金があった——働きためた二十七ループリと、誘惑者のおいていった百ループリと。が、そこを出たときには、わずかに六ループリしか残っていなかった。彼女は金を持ってられない性分で、自分でもばつぱとつかうし、たのむ者にはだれにでも貸してやった。産婆がまず彼女から二か月の生活費——食費と茶代——として四十ループリ取り、二十五ループリは子供を送る費用に消えてしまい、また四十ループリは牝牛の代として産婆に借りられ、二十ループリばかりは——着物や進物に散ってしまったので、カチューシャがもとのからだになつた時には、もうまるで金がなく、まず奉公口をさがなければならぬはめになっていた。口は森林監視人のところに見つかった。監視人は妻帯者であったが、前の分署長同様、第一日からカチューシャにうるさくつきまといはじめた。この男も、虫の好かないやつだったので、彼女は一生けんめい避けるようにした。が、彼は、経験においても狡猾^{こつぱく}さにおいても、彼女より一枚上の人間だった。それにだいいち、彼は主人だったので、どこへでも好きなところへ彼女をだしてやることができた。で、機会をねらって、とうとう彼女を意のままにしてしまった。と、細君がそれに感づき、あるとき、夫がカチューシャと二人で一室にいるところをつきとめて、いきなり彼女に打つてかかった。カチューシャも負けてはいなかったもので、たちまちつかみ合いのけんかとなり、その結果もらうべき給金ももらわないうで、そ

これから追いだされてしまった。カチューシャは街へ行って、伯母の家へ身を寄せた。伯母の亭主というのは製本屋で、もとは相当な生活をしていたのだが、今はすっかり得意を失って、やけ酒にひたり、手あたりしだいのもを酒にかえていたのだった。

でも伯母は、自分で小さな洗濯屋を開いて、それで自分と子供たちを養い、破滅した亭主をささえていた。彼女はマースロワに、自分のところで洗濯女になつてはどうかとすすめた。が、伯母のところにいる洗濯女たちのみじめな生活ぶりを見ると、マースロワは尻ごみして、紹介所へ頼んで女中の口をさがしてもらった。と、口はじき、中学へ通っている二人の息子と三人ぐらしのさる奥さんのところに見つかった。そこへ住みこんで一週間すると、さっそくもう、口ひげのはえかけた総領息子の中学六年生が、勉強をそっちのけにして、マースロワを追いまわしはじめ、彼女に心の安まるひまを与えなかった。ところが母親のほうでは、すべてをマースロワの罪にして、彼女を解雇してしまった。新しい口はなかなか見つからなかったが、ある日また女中の口入れをする紹介所へ行ってみて、そこで、ふとったあらわな手に指輪や腕輪をこてことはめた、奥さんふうの女と行きあわせた。その奥さんは、奉公口をさがしているマースロワの事情を知ると、彼女に自分の所書きを渡して、一度うちへくるようにすすめた。マースロワはその女の家へ行ってみた。奥さんは、あいそよく彼女を迎えて、肉饅頭や甘い酒をごちそうし、なにか書いたものを持たせて小間使をどこかへだしてやった。と、夕方になってその部屋へ、背の高い、ごま塩の髪を長くして白いあごひげをはやした一人の男がはいって来た。この老人は、くるなりすぐマースロワのそばへ腰をおろし、目を輝かしてにやにやしながら、彼女をじろじろ見たり、後女にふぎかけたりしはじめた。主婦はその男をつぎの部屋へ呼びだした。その時マースロワは、主婦が、「田舎から出たての、まだ手入らずだよ」と言っているのを小耳にはさんだ。それから主婦はマースロワを呼びだして、あれは小説家で、お金のどっさりある人だから、彼女が彼の気

に入りさえすれば、なんでも惜しみはしないだろうと話した。そして、彼女は気に入ったので、小説家はこれからたび会うという約束で、彼女に二十五ルーブリの支度金を与えた。しかしその金も、伯母に食費を払ったり、新しい着物や、帽子や、リボンなどを買ったら、たちまち出ていってしまった。数日後に、小説家は二度目の迎いをよこした。彼女は行った。彼はさらに二十五ルーブリくれて、べつの住居を持つようにと言った。

小説家の借りてくれた家に住んでいるうちに、マースロワは、同じ建物の中に住んでいたどこかの陽気な店員とできあつてしまった。彼女は、自分からそれを小説家にうちあけて、べつの小さな住居へ移った。ところが、結婚すると約束した店員は、彼女にはひと言もいわず、明らかに彼女をすてて、ニージニエへ行ってしまったので、マースロワはひとりぼっちになった。彼女はその家にひとりて暮らしていかうと考えたが、彼女にはそれはゆるされなかった。彼女がそうして生きうる道は、ただ黄いろい鑑札(淫光婦の鑑札)をとって検徴を受けるほかないと、近所のおまわりさんが言った。そこで、彼女はまた伯母の家へ舞いもどった。伯母は彼女の流行服や、マントや、帽子を見ると、尊敬の色を見せて彼女を迎え、彼女が今では程度の高い生活をしているものと考えて、洗濯女になれなどとははや言いださなかった。またマースロワにしても、もう洗濯女になろうかなるまいかなどということとは、てんで問題にならなかつた。今では彼女は、細い腕に青ざめた顔をした洗濯女たちが、なかにはもう肺病にかかっている者も幾人かあったのに、夏も冬も窓をあけはなした、三十度からの石けんの湯気のたてこめた店部屋で、洗ったりアイロンをかけたたりして送っている、その懲役のような生活を見て同情の念にかられ、自分もまかりまちがうと、そんな牢獄へおちるところだつたと思つて、おぞけをふるうのだった。そしてちょうどこの時——一人のバトロロンもなく、マースロワにとってはとくに困難だつたこの時に、娼家へ若い娘を供給する女工(女工)が、彼女に目をつけたのであつた。

マースロワは、たばこはもうだいぶ前から吸っていたのであるが、最近例の店員と関係したところから、ことに彼にすてられて以来、日ましに酒を飲むことを習いおぼえた。酒が彼女をひきつけたのは、それが彼女にうまく思われたばかりでなく、これまでになつてきた、いっさいの苦しみを忘れる可能を与え、酒なしではもてなかつた自由な気持ちと自分の値うちを信ずる気持ちを与えてくれたからであつた。酒の気がないと、彼女はいつも気が沈んで、恥ずかしくてたまらなかつたのである。彼女術は、伯母にはごちそうをするし、マースロワには十分酒を飲ますしして、彼女に街でも大きなりつぱなうちへはいることとをすすめ、その商売の有利ですぐれた点を、数限りなくならべたてた。マースロワは、どちらか一つを選ばなければならぬはめになつた——その生活へはいればきつと男のほうからいどまれて、一時的の隠れた姦淫を行なうことになる卑しい女中奉公をとるか、安全で、おちつきのある、法律で保証されている境涯にはいつて、法律で許されて公然のものとされているばかりか、いい金になる不断の姦淫をとるか。そこで彼女は後者を選んだ。そればかりではない、彼女はそうすることによつて、最初の誘惑者や、店員や、その他彼女にたいしてよからぬことをしたすべての人に、復讐してやろうと考へたのである。なおその上に彼女を誘つて、いよいよそれと腹をきめさせるようになつた原因の一つは、そうなればもう、着物などは望みしだい——びろうどだろうと、縐子だろうと、絹であろうと、肩や腕を思うさまむきだしにする舞踏服だろうと、なんでも、いくらでも挑めることができるという女女術の口車であつた。そしてマースロワは、黒びろろどの飾りのついた、ぴかぴか光る黄い絹服——デコルテをつけた自分を想像すると、こばむ氣力がなくなつて、身許証明書を渡してしまつた。と、その晩すぐに、女女術は辻馬車をやとつて、彼女を『ギターエワ』という有名な遊女屋へつれて行つた。

そしてその時から、マースロワにとっては、例の神の戒めと人の道にそむいた、慢性的罪惡の生活がはじまつたのである。もちろんそれ

は、公衆の幸福をおもんばかる当局の許可ばかりか、その保証をすら受けながら、幾百、いや幾百万の女が嘗んでいるところのものではあるが、しかも十中の九人までは、惡性の病氣を得て、早老早死におわる生活なのである。

夜の躁宴のあとの、朝から日中へかけての重苦しい睡眠。三時か四時ごろになつてやつと、きたならしい寢床から疲れきつた身をおこす。暴飲のあとのゼルテル水や、コーヒ、化粧着や、ジャケツや、ガウンのままのものうげな室内漫步。カーテンのかけから外をのぞいたり、お互いの間ではりのない口げんかをしたり、それからからだや髪を洗つたり、塗つたり、におわしたり、衣裳の寸法をとらせたり、そのことでおかみとけんかをしたり、鏡の中で自分を吟味したり、顔や肩をよそおつたり、甘いあぶらっこい食事をとつたり。それから、肌もあらわなければらしい絹服を身につけ、飾りたてた、まばゆいばかりの明るい広間へ出る。——客がくる——音楽、ダンス、菓子、酒、たばこ、そして青年、中年、子供あがり、よばよばじじい、独身者、妻帯者、商人、店員、アルメニヤ人、ユダヤ人、ダクタン人、金持ち、貧乏人、健康者、病人、酔っぱらい、しらふの者、乱暴者、やさしき男、軍人、文官、大学生、中学生など、——あらゆる階級、あらゆる年齢、あらゆる性質の者との姦淫。どなる、ふざける、けんかをすする、音楽、たばこ、酒、また酒、たばこ、音楽と、夕方から明けがたまでのくりかえし。そして朝になつてやつと、解放と重苦しい睡眠。こうして同じことが、毎日、一週間じゅうつづくのである。ただ一週のおわりには、国家の施設——警察署へ行く、そこには、国家の官職にある吏員であり医者である男子が、ときにはまじめに嚴格に、ときにはふざけ半分の快活な態度で、人間ばかりか動物にすら、その犯行を防ぐために天から賦与されている羞恥心を無視しながら、これらの女を検診して、彼女たちが過去一週間のあいだ自分の同類とともに行なつてきた犯行の継続にたいして、新しい許可を与へるのである。そうしてあとはまた同じ一週間。また同じ毎日——夏でも、冬でも、

平日でも、祭日でも。

こうして、マースロワは七年をすごした。その間に彼女は家を二軒かわつて、病院へも一度はいった。そして彼女の遊女屋生活の七年目、最初の墮落から八年目の、彼女が二十六の時に、その身に一事件がおこつて、そのために彼女は獄に入れられ、人殺しや女どろぼうといふしよに獄にあること六か月のちに、はじめて今、法廷へひかれて行くのであつた。

3

遠い道に疲れたマースロワが、護送兵たちといふしよに地方裁判所の建物に近づいたとき、最初に彼女を誘惑した彼女の養い主の甥、公爵ドミートリイ・イワノヴィッチ・ニエフリュドフは、まだ自分の家の、背の高い、ばねいりの、もみ乱されたベッドの上に、ぬくぬくと羽根ぶとんに埋まって寝ていた。そして、胸のひだにアイロンのあたつた、さっぱりとしたオランダ寝間着のえりをひろげて、紙巻きたばこをふかしていた。彼は、自分の前に目をすえたまま、今日これからしなければならぬこと、昨日あつたことなどについて、考えていた。

彼は、自分がその令嬢と結婚しなければならぬように人々から思われている、富裕な貴族のゴルチャーギン家ですごした昨夕のことを思いだしながら、ほつとといきをついて、たばこの吸いがらを投げすて、銀の巻きたばこ箱からもう一本とりだそうとしたが、思いなおして、すべすべした色の白い足をベッドからおろし、それでスリッパをさぐると、肉づきのいい肩に絹のガウンをひっかけ、早足でどしどしと、寝室の隣の、エリキシルやオーデコロンや、香油や香水など、そうした人工的な香気の一面にしみこんだ化粧室へ、はいって行った。

そこで彼は、特製の歯みがきをつかつて、ところどころ充填してある歯をみがき、香料入りのうがい液で口をすすいでから、全身を洗

い、いちいちがったタオルで拭いはじめた。そして、においのいい石けんで両手を洗い、長くのばした爪をいろんなブラシで念入りにみがき、大きな大理石の洗盤で顔やふとい首筋を洗つてしまふと、こんどはさらに、寝室から三つめのシャワールの支度のしてある部屋へ行った。そしてそこで、よく脂肪のまわつたまっ白なたくましいからだに、冷たい水をざつと浴び、あらひ大タオルですつかりふきとつてから、きれいにアイロンのかかった下着を着、鏡のようにみがきあげられた靴をはいて、化粧台の前に腰かけ、二つのブラシで、黒い縮れ毛の大きからぬあごひげと、前のほうがいくらか薄くなりかけている巻き髪とをとかしはじめた。

彼の使っているすべてのもの、身のまわりの品は——肌着にしろ、着物にしろ、履物にしろ、ネクタイにしろ、ビンにしろ、カフスボタンにしろ、——みな最上等の高級品で、けばけばしくない、単純で、じょうぶで、高価なものばかりであつた。

十種ばかりあるネクタイやビンのなから、最初に手にあたつたものを一つえらみとると、——これらのものもかつては目新しく、気に入っていたのであるが、今はまったくどうでもよかった、——ニエフリュドフは、ブラシをかけていすの上にちゃんとそろえてあつた服を身につけ、まだ十分さわやかとまではいかないがらに、一応すっきりとした香り高い男になつて、昨日三人の下男がはめ木細工の床をふきこんでいった細長い食堂へと出て行った。そこには、かしの巨大な食器だなど、同じ木のそれに劣らぬ大ききの、伸縮できる、獅子の足の形に彫刻した、足を広くふんばつた様子がいかにもどっしりとして見える、食卓とがあつた。大きな組みあわせ文字のついた、糊のきいた薄手のテーブルクロスにおおわれたこの食卓には、香りの高いコーヒーのはいつた銀製のコーヒーわかしゃや、同じ銀の砂糖つばや、煮たてのクリームを入れたジャム容器や、焼きたての白パン、乾パン、ビスケットなどを盛つたかごなどが、のつていた。そして食器のそばには、届いたばかりの手紙と、新聞、新刊の *Revue les deux*

Montes (兩世界評論)とが置いてあった。ニエフリュードフが手紙を取ろうとしたとたんに、廊下へ通ずる戸口から、喪服を着て、レースの頭かざりに髪分けめを隠した、ふとった中年の婦人が静かにはいって来た。それは、つい近ごろにこの家でなくなったニエフリュードフの母親の小間使だったが、今は家政婦として彼のもとに残っている、アグラフェーナ・ベトロローヴナであつた。

アグラフェーナ・ベトロローヴナは、つづけてではないが、ニエフリュードフの母親といつしよに、十年ばかりも外国で暮らしたことがあるので、様子にももの腰にも奥さまらしいところのある女だつた。彼女は子供の時分からニエフリュードフ家に住んでいたで、ドミートリイ・イワーノヴィッチ (ニエフリュードフの名と父稱) がまだミートンカと呼ばれたころから知っていた。

「お早うございます、ドミートリイ・イワーノヴィッチ」

「お早う、アグラフェーナ・ベトロローヴナ。何か珍しいことでもあるかね？」とニエフリュードフは冗談の調子できいた。

「公爵夫人からですか、公爵令嬢からですか、お手紙でございますよ。もうよほど前にお女中の方がお持ちになって、わたくしの部屋でお待ちでございます」とアグラフェーナ・ベトロローヴナは、手紙を渡しなが、意味ありげな笑顔になって言った。

「よろしい、いますぐ」ニエフリュードフはこう言つて手紙を受け取つたが、アグラフェーナ・ベトロローヴナの微笑に気がつく、眉をひそめた。

アグラフェーナ・ベトロローヴナの微笑は、その手紙が、アグラフェーナ・ベトロローヴナの考えでは、ニエフリュードフが結婚するものと思われていた公爵令嬢コルチャギナから来たものであることを意味していた。そしてアグラフェーナ・ベトロローヴナの微笑によつて表現されたこの予想は、ニエフリュードフには不愉快なものだったのである。「では、もうしばらく待つように申しますでございます」とアグラフェーナ・ベトロローヴナは、ちがったところに置いてあつたテーブル

ラシをとつて別のところへ移してから、泳ぐようにすつと食堂を出て行つた。

ニエフリュードフは、アグラフェーナ・ベトロローヴナの持つて来たいいにおいのする手紙をひらいて、読みはじめた――

「あなたさまの記憶係を引き受けました身の義務として、一筆ご注意申しあげます」――端の切つてない厚い灰色の紙の一片に、鋭いけれどもまのびした筆跡で、こんなふうにかかれてあつた――「本日四月二十八日は、あなたさまには陪審員として法廷へご出席あそばさなければならぬ日ゆえ、しぜん例の安うけあい昨日お約束なさいましたコロソフ一家やわたくしどもの絵の展覧会見物は、おできにならないわけでございます。正規の時刻にご出席なさいませんと、à moi-ins que vous ne soyez disposé à la cour d'assises les 300 roubles d'appoint, que vous vous refusez pour votre cheval (いづや馬をお求めなさるのにさえ躊躇あそばした三百ルーブリの大金を罰金としてお納めなさなければなりませんですよ) わたくしはこのことを、昨日あなたさまがもうお帰りあそばしてから、気がつきましたの。ですから、どうぞお忘れあそばしませんように。

公爵令嬢 エム・コルチャギナ
裏面には、つぎのような追ひ書きがあつた――

「Maman vous fait dire que votre couvert vous attendra jusqu'à la nuit. Venez absolument à quelle heure que cela soit. (今日の晩餐は夜中まででも、あなたさまのお席はとっておきますとの母よりの伝言でございます)。何時になつてもかまいませんから、ぜひぜひお越しくださいませ)」

エム・ケイ

ニエフリュードフは眉をひそめた。この手紙は、コルチャギン公爵令嬢がもう二か月も彼にたいして行なつてきた、目に見えない糸でしだいに強く彼を自分のほうへ引き寄せようとする、巧みな手管の継続であつた。ところが、ニエフリュードフには、あまり若くない人や、熱烈な恋愛に落ちているでもない人々が、結婚にたいしてふつうに

感ずる躊躇以外に、たとえその決心をつけたとしても、今すぐ結婚の申し込みをすることのできない重大な原因があったのである。その原因は、彼が十年前にカチューシャを誘惑して、そのまますててしまったことにあるのではなかった、——そのことはもうすっかり忘れてしまっていたから、それを自分の結婚の妨げと考えたわけではもうとうなかった。その原因というのは、彼にはちょうどこの時、ある人妻との関係があり、自分のほうではもう切れてしまつたつもりだったが、相手のほうがなかなかそうはゆかなかつたことであつたのである。

ニエフリユードフは、女にたいしては非常に臆病であつたが、この臆病なところがつまり、その人妻に、彼を征服しようという野望をおこせたのであつた。その女というのは、ニエフリユードフが選挙の時ににかけて行つた郡の貴族長の夫人であつた。そして、この夫人は彼を、彼としては日一日としだいにふかくなるにつれて、ますますいや気のさしてくるような関係の中へ、ひきこんで行つた。最初のあいだこそニエフリユードフも、誘惑を避けることができなかったのであるが、後には、彼女にたいしても自分を罪あるものと感じて、彼女の承諾なしにこの関係をたち切ることもできなかったのである。そしてつまりこれが、ニエフリユードフの、たとえ自分はそうしたいと思つても、コルチャーギン家の令嬢にたいして申し込みをするなどという権利はないと考えた原因なのであつた。

卓の上にはちょうどまた、この夫人の夫からの手紙もおかれてあつた。その筆跡と消印を見たとなん、ニエフリユードフは顔をあくくして、危険の切迫にさいして彼がいとも経験する、例の精力の昂揚をおぼえた。しかし、彼の興奮はいくらもなものであつた——ニエフリユードフのおもな領地のあつた郡の貴族長であるこの夫は、ただ、五月の末には臨時地方会議があるはずだということをニエフリユードフに知らせ、その会議では学校や鉄道に関する重要問題が討議され、それについて反動派の猛烈な反対も期待されているさいであるから、ぜひ会議に出席して、*dinner au coup d'épée*（ひて肌ぬいで援助してもらい

たい）ということを頼んできたのであつた。

貴族長は自由主義者だつた。そして彼は、若干の同志を糾合して、アレクサンドル三世の即位とともに擡頭した反動勢力に対抗して、その闘争に没頭していたので、自分の不幸な家庭生活のことなどは、なにひとつ念頭になかつたのである。

ニエフリユードフは、この男との関係上味わなければならなかつた苦しい気持ちを逐一思ひかへた——ある時は、夫に感づかれたと考へて、決闘にたいする覚悟をさだめ、その時には自分は空へむけて発射しようと思つたことを思いだしたり、またある時は、彼女がやけをおこして身投げしようとか園の池のほうへ駆けだしたのを、自分が追つかけてさがしに行つた恐ろしい場面もあつたことなどを思ひかへた。《いや、おれはいま出かけることはできない、あの女から返事のこないうちは何をすることもできない》とニエフリユードフは考へた。一週間前に彼は彼女にあてて、きっぱりとした手紙を書いた。その手紙で彼は、自分の罪を十分に認め、その罪をつぐなうためにはどんなことでもするつもりであるが、とにかく彼女の幸福のために、二人の関係はこのさい永久におわたつたものと考えろといつてやつた。で、彼はいま、この手紙にたいする返事を待っていたのであるが、まだなんの返事もなかつた。返事のないということは、いくぶんかはよい徴候であつた。もし彼女が別れ話に不服だつたら、もうとくに返事をよこすか、あるいはこの前にもしたように自分で出かけてくるかするはずであつた。聞くところによると、先方には、いましきりにとり入ろうとしているどこかの士官があるとのこと、このことは、彼を嫉妬で苦しめていたが、同時にまた、自分を苦しめる虚偽からの解放という希望で、彼を喜ばせてもいたのである。

いま一つの手紙は、領地の管理人からのものであつた。管理人はその中で彼ニエフリユードフに、相続権を確定するためにぜひ自身出ていくる必要があることを書き、なお、土地の管理は今後いかにするか——母公在世当時のままにするか、あるいは、自分がかねがね今はな

き公爵夫人に献策し、いままた若き公爵にたいして提案している方法により、農具をふやし、これまで百姓たちに貸し付けてあった土地を全部こちらの手で耕作するようにするか、いずれなりご解決を願いたいと書いていた。管理人はさらに、この方法のほうがどれほど有利だかしれないとも書いていた。そのついでに管理人は、一日までに送るはずになっていた三千ルーブリの送金の、いくらかおくれたことをも詫びていた。その金はつぎの郵便で必ず送る。彼がその送金をおくらしたのは、ちかごろ百姓どもがますます横着になり、お上の手を借りて強制するの でなければ、金を集めることも容易でないからだというのだった。この手紙は、ニエフリユードフにとって、愉快でもあり不愉快でもあった。広大な財産にたいする自分の権力を感じるのは愉快だったが、自分がずっと若いころにはハーバート・スベンサーの熱心な崇拜者であり、ことに自身大地主となつてからは、正義は土地の所有を許さずという Social Status (社会平衡論) にある原則に、いままらのようにうたれたことなどを思うと、不愉快でもあったのである。青年時代の一本気と果敢な性質とから、彼は当時、土地は私有財産たるべきものにあらずと公言したばかりでなく、また、大学在学中それについての論文を書いたばかりでなく、じつさいその時分には、自分の信念に反して土地を私有するのをいさぎよしとしなかったところから、土地の一部(母に属するものでなく、父の遺産として彼自身に譲られたもの)を百姓たちにくれてしまったこともあった。で、いま、相続によつて大地主となつてみると、彼は、二つのうち一つを選ばなければならぬはめに立ちいたつた——すなわち、彼が十年前に父の遺産の二百デシャチーナ(デジャチナ)にたいして決行したように、自分の所有権を放棄するか、あるいは無言の同意によつて、自分の以前の思想のすべてをあやまれるもの虚偽なものとして承認するか。

ところが、前者をとることは彼にはゆるぎなかった。なぜなら、土地をほかにしては、生活の方法がなにひとつなかったからである。勤務することはきらいだったが、かといつて、ぜいたくな生活の習慣

はもうすっかりしみこんでしまつていて、とてもはなれられそうになかった。それにいまでは、青年時代のように、信念の力も、決断も、世間をあつといわせようという野心も、希望も、もはやもちあわせていなかったもので、どうすることもできなかったのである。では、後者をとつて——あの事理明白な、争いがたい土地私有不法論を拒否してしまふということも、当時あれほどスベンサーの「社会平衡論」に動かされ、後また、かなり後のことであるが、ヘンリ・ジョージの著作の中で、そのりっぱな論証を見いだしている彼には、とてもできない相談であつた。

こんなわけで、管理人の手紙は彼に不愉快だったのである。

4

コーヒーを十分飲んでしまつたと、ニエフリユードフは、裁判所へ出頭すべき時間の書いてある通告書をしらべたり、公爵令嬢への返事を書いたりするために、書斎へ行つた。書斎へ行くには、アトリエを通らなければならなかった。アトリエには、書きかけの絵を裏返しにした画架が立つていたり、さまざまな習作がかけつらねられてあつたりした。もう二年ごし苦心していたその絵や、かずかずの習作や、アトリエ全体の様子が、彼の頭に、最近とくに強く感じている、絵にはとても見込みがないという無力感を、よびおこした。彼はこの感情を目して、あまり繊細に発達しすぎた審美感のためと解釈していたが、とにかく、この意識はひどく不愉快なものであつた。

七年前に彼は、自分には絵の天分があるものとときめこんで軍職をなげうち、以来、芸術的活動の高所から、他のいっさいの活動をいくらか軽蔑の目で見おろしてきた。が、今にして思えば、彼にそんな権利はなかったのである。したがつて、それについての思い出はすべて、不愉快であつた。彼は重苦しい気持ちでこれらのぜいたくなアトリエの装置をながめ、そしてうかぬ気分になつて書斎へはいった。書斎